



# ひらほく新聞

ひらほく新聞で検索!

★ホームページ ひらほくランド★

http://www.hirahoku.com/

☆バックナンバー含め ひらほく新聞を  
閲覧・ダウンロード可能です!

発行所 読売センター平塚北部 (ひらほく) 山本 直 〒254-0013 神奈川県平塚市田村9-4-32 電話 0463-54-2807



多くの新聞が、事件・事故などネガティブな話題の記事の比率が多いなか、元気をもらえて、感動で心揺さぶられる内容の記事しかないという、かなり変わった『みやざき中央新聞』。素晴らしい記事を何度かご紹介してきましたが、今回はその感動の社説を執筆している「魂の編集長水谷もりひと」さんの新著『いま伝えたい!子どもの心を揺るがす』すごい「人たち」という書籍の紹介です。

宮崎市に本社のある「みやざき中央新聞」は小さなミニコミから始まり、現在では47都道府県すべてに読者をもっています。海外9か国にも広がっています。出版社から「面白い」と言われて、新聞の顔である「社説」を集めた、『日本一心を揺るがす新聞の社説』というタイトルで書籍化、シリーズ3冊がベストセラー、累計10万部となっています。

「はしがきより」  
「100年後の日本のことを考えると、第一に重要なのはやはり教育です。それで、今回は学校の先生とか子育てをしている人、孫育てをしている人、幼稚園や保育園の先生など、子どもたちと直接に接している大人、そして何より中学生や高校生、あるいは20代の若者に読んでもらいたい社説を選びました。」

20余年「感動の情報」を伝え続ける「魂の編集長」が選んだ「いい話」40編。みやざき中央新聞、感動の社説より抜萃、2編をご紹介します。

## すべて「今」につながっている

友人のエリさん(たぶん50代前半)が講演するということで、聴きに行った。

話し方教室やビジネスマナーの講師をされていて、内面からにじみ出てくる笑顔が美しい女性だ。さぞかし楽しい話が聴けるだろうと思っていながら、彼女の壮絶な人生の物語に圧倒された。

商売をしている男性とお見合い結婚したのは25歳のときだった。少し前に三つ年上の姉が、やはり商人の家に嫁いでいた。厳格な教育者で、自

分から先に絶対あいさつをしない父親とは違い、姉が嫁いだ先のご両親は、腰が低く、誰にでも頭を下げ、相手の気持ちを汲んで、思いやれる心の温かい人たちだった。

エリさんは商人の素晴らしい素晴らしさを垣間見た。だから自分の結婚相手も、彼の家も、きつとそうなんだと思った。

ところが、結婚式を終えて、嫁入りした日から夫は豹変した。彼の家は男尊女卑の価値観が強かった。「嫁の分際で」「誰に食わせてもらっているんだ」という夫の言葉が日常的にエリさんの心に突き刺さった。

商売のことは何も分からないうエリさんは、「とにかく誰よりも苦勞しよう」「誰よりも心を込めて一生懸命頑張ろう」と自分に言い聞かせて、「少々なことは我慢しなければならぬ」と覚悟も決めた。

それにしても夫の言葉はきつかった。彼女を罵倒する言葉は一日中飛び交い、彼女の一家の悪口まで言われた。

「おはようございます」と言うのと、「その声が気に入らない」と突き飛ばされ、黙っている、蹴飛ばされた。外出するときは必要最低限のお金を握らされ、帰る時間まで管理された。

「私が嫁として至らないからだ。私が悪いから両親まで悪く言われるんだ。もつと夫に尽くしていけばいつか分かってもらえる」、そう思いながら毎日睡眠時間3時間で頑張った。

ついに精神的に異常をきたすようになった。実家に戻って療養したが、1か月もすると、「体裁が悪いから帰ってこい」と言われ、呼び戻された。

そんなエリさんに胸を痛めていたお姉さんから手紙が届いた。世界的なファッションデザイナー・高田賢三のファッションショーのS席のチケットが2枚入っていた。

「行かせてもらえるか分からない」と、いつも相談相手に話したら、「私に任せて」と言って夫の親と交渉してくれた。そして2人で出掛けた。

「途中で倒れるかもしれない」、会場に着いてもエリさんは不安だった。

やがてオーブニングの音楽と共に、華やかな光がパッとステージを照らした。最前列に座る自分に向かって、向こうから満面の笑顔のモデルが踊るように歩いてきた。

光のエネルギを自分に届けてくれているように思えた。雷に打たれた感じだった。

「私は今まで何をやってきたんだらう。泣いて暮らすも一生、笑って暮らすも一生、だったら笑って暮らす」と思いが沸きあがってきた。

一瞬で世界が変わった。翌朝、目が覚めたら鏡を見て、ニコッと笑い、「おはよう」と自分にあいさつした。そして鏡の中の自分を褒めた。「夕べも3時まで起きていたのに今朝も目覚まし時計のベル一回で起きられたあなたは偉いね」そしてこう言った。「まだ笑顔になれるじゃない」「探せばあなたにもいいところがあるじゃない」

夫が相変わらず自分を罵倒すると、「あなたはまだそんなことを言っているの。私はもう違う方向を見ているの」と思えるようになり、傷つかなくなった。

その後、エリさんはお店を盛り上げるために懸命に努力した。しかし、長年続いた放漫経営はどうにもならず、店は倒産。彼女は再び絶望のどん底へ落とされたが、たまたま目に飛び込んできた「話し方教室生徒募集」という新聞広告に導かれ、新たな人生の扉を開けた。

ここからの人生もまたドラマチックなのだが、もう行数がない。

「途途中で倒れるかもしれない」、会場に着いてもエリさんは不安だった。

「途途中で倒れるかもしれない」、会場に着いてもエリさんは不安だった。

「途途中で倒れるかもしれない」、会場に着いてもエリさんは不安だった。

「途途中で倒れるかもしれない」、会場に着いてもエリさんは不安だった。

「途途中で倒れるかもしれない」、会場に着いてもエリさんは不安だった。

「途途中で倒れるかもしれない」、会場に着いてもエリさんは不安だった。

「途途中で倒れるかもしれない」、会場に着いてもエリさんは不安だった。

「途途中で倒れるかもしれない」、会場に着いてもエリさんは不安だった。

## 誰かのためだったら諦めない

次に、「すごい考え方」より。

「目標」と「目的」は、とてもよく似た日本語だが、意味は全然違う。目標とは「○○に向かって」であり、目的とは「○○のために」だ。

卒業式するとき、来賓として招待される教育委員会の先生や、校長先生のお祝いのメッセージの中に、「卒業生の皆さん、これから明確な目標を持って生きてください」という話をよく聞くことがある。

もちろん明確な目標を持つことは大事だ。ただ、目標だけあって、目的がなかったら、さまざまな困難にぶつかったとき、安易にその目標を断念してしまふ。しかし、目標と同時に目的を持っていたら、それがとても大きな力になる。このことをクロスカントリースキーの日本代表選手、新田佳浩さんが教えてくれた。

新田さんは、岡山西栗倉村という、冬場は雪の多い山あいの村に生まれた。家は代々続く米農家だ。

3歳のとき、おじいちゃんが運転する農機具のコンバインに左手を巻き込まれ、肘から先を失った。以来、障がい者としての運命を背負うことになる。

翌年の4歳からスキーを始めた。小学校に入るとクロスカントリースキーに夢中になった。3年生のときに初めて参加した地元の大会で優勝。その後、県大会でも優勝するなど、小学校卒業するまで4つの優勝トロフィーを手にした。

しかし、中学になって壁にぶち当たった。両手でストックを使う健康者の選手に勝てなくなったのだ。最初の挫折だった。中学3年のとき、スキーをやめた。

転機は高校1年のとき訪れた。2年後に迫った長野パラリンピックの関係者が出場を勧めに来たのだ。健康者と競ってきた新田さんは、障がい者スポーツに興味を示さなかった。しかし、関係者に見せられたビデオに釘付けになった。新田さんと同じ左手のないドイツの選手が障がい者とは思えない速さで滑っていた。

元々実力のあった新田さん、長野パラリンピックでは8位、翌年の世界選手権で優勝、そしてソルトレイクパラリンピックでは銅メダルを獲得した。

4年後のトリノパラリンピックでの金メダルは確実視されていた。そのためにスタッフは、新田さんの身体のハンディを科学的に分析し、腰の高さ、膝の角度など、右手一本でも健康者並にスピードが出るフォームを3年かけて作り上げた。確実に金メダルに向かっていった。

☆☆裏面へ続く☆☆